

日本統治期台灣文學
日本人作家作品集

別

卷「内地作家」

河原功編

綠蔭書房

日本統治期台灣文學
日本人作家作品集

別

卷〔内地作家〕

河原功編

綠蔭書房

凡例

一、作品のオリジナリティをできる限り生かすために影印版にした。ただし体裁の統一をはかるために、原本のノンブル、柱、囲み罫の一部は削除し、新たに復刻版のノンブル、柱をいれた。

一、復刻版の判型は四六判に統一した。そのため判型にあわせて、一部の作品については、原本を適宜、縮小・拡大使用した。

一、各作品の発行年月日、掲載誌・掲載書、掲載頁等の初出一覧と作品解説および略年譜は巻末に掲載した。

一、小説、随筆等の分類を目次の各タイトルのあとに付した。

一、作品の収録にあたっては、著者及び著作権継承者の承諾を得た。

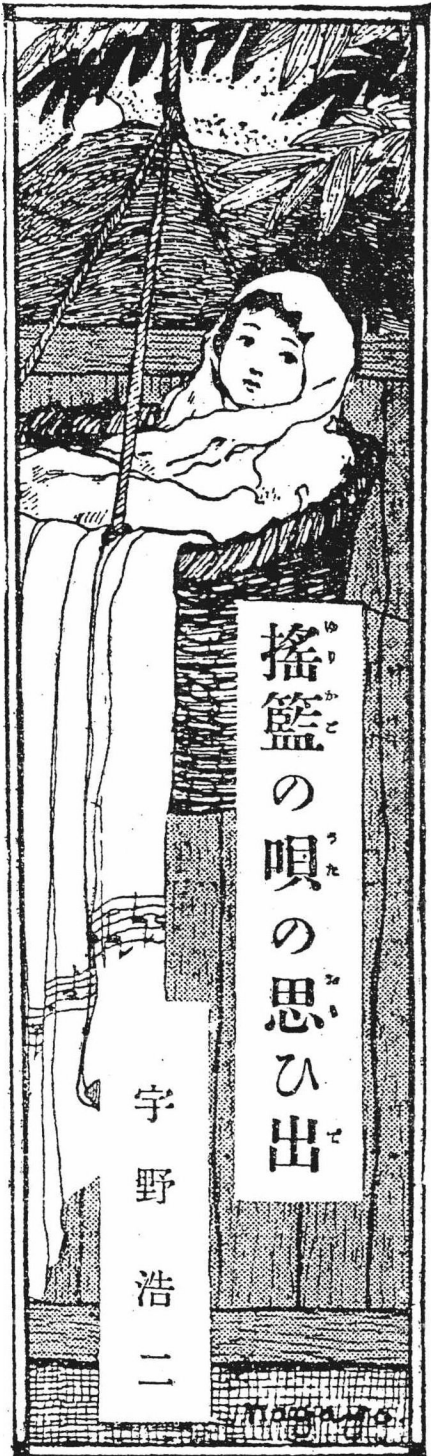
目次

別 卷「内地作家」

揺籃の唄の思ひ出 (童話)	宇野浩二	7
霧社 (創作)	佐藤春夫	21
女誠扇綺譚 (創作)	佐藤春夫	55
殖民地の旅 (一) (創作)	佐藤春夫	97
殖民地の旅 (二) (創作)	佐藤春夫	111
総督府模範竹林 (小説)	伊藤永之介	151
平地蕃人 (小説)	伊藤永之介	189
熱帯柳の種子 (創作)	中村地平	215
旅さきにて (創作)	中村地平	223
蕃界の女 (創作)	中村地平	237
南方の墓 (創作)	真杉静枝	267
日月潭工事 (小説)	田村泰次郎	285
華麗嶋風物誌 (一) (紀行)	北原白秋	313
華麗嶋風物誌 (二) (紀行)	北原白秋	326

野蠻人(小説)	大鹿 卓	355
欲望(小説)	大鹿 卓	391
台湾游記(紀行)	野上弥生子	411
蕃界の人々(紀行)	野上弥生子	433
台湾の旅(一)(創作)	窪川(佐多)稲子	453
台湾の旅(二)(創作)	窪川(佐多)稲子	464
台湾の旅(三)(創作)	窪川(佐多)稲子	472
台湾の旅(完)(創作)	窪川(佐多)稲子	480
台湾の息吹(一)(小説)	丹羽文雄	491
台湾の息吹(二)(小説)	丹羽文雄	499
台湾の息吹(三)(小説)	丹羽文雄	507
台湾の息吹(四)(小説)	丹羽文雄	514
台湾の息吹(五)(小説)	丹羽文雄	521
台湾の息吹(六)(小説)	丹羽文雄	531
台湾の息吹(終)(小説)	丹羽文雄	540
台湾とどこどころ(隨筆)	広津和郎	551
作品初出一覧 557		
内地作家略年譜・作品解説	河原 功	561

宇野浩二



搖籃の唄の思ひ出

宇野浩二

臺灣の蠻地に近い、或る山の麓に、戸數僅か二十軒にも足りない小さな村があつた。その村はづれに正直者といふ評判の夫婦と、その間に千代といふ、その時三歳になる可愛らしい女の子と、親子三人暮らしのむつまじい家があつた。

指折り數へると今から丁度十五年前の冬の初めのことである。それは、年中暑い所の様に思はれて居るこの臺灣でも、十一月の末といへば、況してそんな山里のことだから、蟲の聲さへ日毎にうら枯れて行く時だ。夜となると凄い程さびしい。

裏の山の端に小さな月が出て居た。それを背にして千代の父は流暢で、明日の仕事の用意にとて斧を砥いで居た。家の中では薄暗いラムプの下で千代の母は冬着のこしらへに忙しく針を運ばせて居た。その母の頭の上に、丁度ラムプと反對の位置に、一つの新しい搖籃が掛つて居て、その中に小さいお千代が眠りかけて居たのである。母は小さな聲で子守唄をうたひながら針の手をつづけて居るのだが、時に思ひ出してはその針を持つたまゝの手で搖籃を動かすのである。と搖籃はしばらくの間母の子守唄と

調子を合はす様に揺れるのであつた。

『静かな晩だな』と斧を砥ぎ終つて、今まで曲めて居た腰を痛さうに伸しながら、父が聲をかけた。

『明日もいゝ天氣だらう。』

『しつ！』と母はたしなめる様に、矢

張針を持つたまゝの手でものを抑へる様な手つきをして言つた。

『今お千代が寝かゝつて居る處

ですから。』

そして又母は静かに子守唄を

つづけた。父も静かに砥石を片

附けたり斧を仕舞つたりして居た。

折りから戸外の方遠くの方から穩

やかならぬざわめき聲が起つた。お千代の

父母は思はず耳をそば立てると、その聲は段々と大

きくなり段々と近づいて來た。次第にはつきりと人

々の叫ぶ聲泣く聲足音などが聞えて來た。

やがて、何事が起つたのかと確かめる暇もなく、



『生蕃だ、生蕃だ！』といふ聲がした。

父は慌しく家の内に走り上つて、壁から銃をと

り下ろし、短銃を母の手に渡した。

お千代はその時すつかり寝入つて居た。そ

んな人々の喧き聲にも眼を覺まさない

程よく眠つて居た。父は、狼狽しな

がらも寝て居るお千代に氣をとら

れて立ち噓んで居る母を、無理

やりに引き連れてひと先づ戸外

へ出た。

處が丁度二人の者が戸外へ出

た時、喧き聲が一層大さくなつて、

折りから鐵砲の音と共に數人の村人

たちが逃げて來る處であつた。そして直ぐ

後から生蕃の追つて來る氣配がした。

『大變だ、大變だ！ 大變な數の生蕃だ！ 直ぐ逃

げなければ危い！』
て父は瞬間に母を肩に掛けて、皆の人々と共に走

つた。「お千代を、お千代を」と母が泣き聲になつて叫んで居るのも氣にかけて居られない程、父も、皆の者も、夢中で馳け出したのである。

さうして漸く皆の者は無事に隣りの村まで逃げ延びた。しかしお千代の母はそこへ着いた時には氣絶して居たのである。

無事に逃げて來た人々の中にも、子供を連れ出した人は稀であつた。子供に引かれた人は大抵逃げ遅れて了つた。お千代の母とても、その時無理に脊負はれて逃げなかつたなら、屹度お千代と共に、その時限り行方不明になつたか、或は外の大抵の人たちの様に、首だけ持つて行かれて殺されたに違ひない。

——これは前にもいつた通り、今は昔十五年前の出來事である。その當時は、お千代の父母も殆んど御飯も喉に通らぬ位に悲しんだけれど、やがてお千代の妹や弟たちも生れ、今ではもうその一番上の妹が十二になつて居て、その外に九歳になる弟と五つになる妹も出來て居るので、お千代の

ことは次第に死んだ者の様に悲しさも薄らいで行つて、たゞあの騒動の日を命日として懇ろに後の弔ひをして居たのであつた。

お千代が昔寝たあの搖籃は、もう古びて了つたけれど、昔のまゝの所に吊られて、今は一番末の妹のお露のものになつて居る。父は矢張毎日夜になると裏の流場て斧を砥いては、晝の疲れに早くから寝て了ふ。母は子供が殖えたので、殊にこの冬の始めには、子供等の冬着の支度に忙しく、每晚遅くまでラムブの下で針仕事をして居る。たゞ十五年前と變つたのは、近頃町から買つて來た新しい錫の壺の、今迄のよりはずつと明るいラムブと、それに宵の口は搖籃を搖る者が、針を持つ手の忙しい母ではなくて、一番上の姉のお小夜になつたことである。それに年毎に開けて來て、生蕃の襲來することなども稀になり、又よし襲うて來ることがあつても、それを防ぐだけの備へも出來た。

處がその十五年目の冬の初めの頃、殆んど隔日位

に、その邊の村々を順々に襲ふ生蕃の一隊が現はれた。そしてその度に村々では幾人かの死傷者を出すのであつた。

この生蕃の一隊は數は餘り多くはないが驚く程勇猛で慄慄で、然もその隊長は馬に乗つた少女である。未だその上にその少女は確かに日本の女であるといふ事が誰云ふとなく傳へられた。

お千代の村では一層嚴重に守りを堅めて、尙出來得るならばその一隊を攻め滅ぼさうと用意をした。

處が到頭その生蕃の一隊が襲つて來た。

それは、不思議にも、お千代の命日の晩であつた。丁度十五年前の晩の様に、裏の山の端には小さな月が出て居た。「そら來た！」といふので、村の家々は皆戸を開けて、働き盛りの男ばかりが、鐵砲をもつ



て生蕃を迎へて戰つた。

今度は用意も出來て居た事として、生蕃の方が負けに逃げた。村の男たちは勢よく鐵砲を發ちながら、

それを追つかけた。逃げながら射たれて仆

れる生蕃も澤山あつた。その中に此方

から發ち出した一つの彈丸が、その

隊長の少女が乗つて居る馬に中つ

て馬が仆れた。そこを追ひつめ

られて、少女は激しく抵抗つた

けれども、何といつても女の身

の、然も一人に多勢である。そ

の時遂に生捕にせられたのであつ

た。評判の生蕃の隊長の日本の女が

捉まつたと云ふので、その翌日は村の人々

は言ふに及ばず、一里も二里も離れた隣村からも、人々が多勢見物に來た。處がもつと不思議なことには、

その生蕃の隊長は、十五年前、三歳の時にこの村か

ら攫はれて行つたお千代だといふことが、口から口

に傳はつた。年齢は十八九で、色こそ黒いが、綺麗な娘である。それに右の眉の横にある疵痕までが、お千代に違ひないと云ふのである。

そこで村の總代からお千代の父母を呼びに來たのと、噂を聞いて二人が取るものも取り敢へず出かけたのと、殆んど同時であつた。お千代の父母は呼吸もつまるかと思ふ程、胸の騒ぐのを覺えた。その二人が村役場の庭に駆けつけた時には、折りからかの女生番を取り卷いて居た群集は俄かにどよめいた。而して誰が命令するともなしに二人の爲に通路を開いた。群集から三間と離れて居ない所に、生番の服装をした女が、恥かし氣もなく、それどころか恨めしさうな鋭い眼つきをして、後手に縛られたまゝ、四邊をぐるぐると見廻して居た。その傍に五つ六つの椅子があつて、村長と巡查と村の總代たちが腰を掛けて居た。

お千代の父母は夢中でその前に飛び出した。四邊は急に水でも打つた様に静まり返つた。その縛られ

て居る女の前に、父は釘付けにせられた様に立つて、ぢろ／＼と無神経な顔をして居るその女を見つめて居た。母も亦その傍に寄つて、對手の鷹の様な凄

眼を避けながら、しげ／＼と眺め入つた。

突然、母はその前に仆れる様に膝をついて、何事か口の中で言ひながら、泣き出した。それと共に父は一步村長の前に進んで、小さいけれど決然とした聲で言つた。

『これは確かに娘の千代です！』

かう云つて父も亦頭を垂れた。

今まで黙つて見て居た多勢の人たちは、急にざわ／＼と騒ぎ初めた。そして口々に何か話し合つた。

『静かに！』と巡查が椅子から立つて制した。

『お千代や、お千代や！』とこの時母は堪り兼ねて、人目をも恥ぢず、泣きながら言つた。

『お千代や、よく生きて居てくれた。これ、私が分らないか？ お母さんだよ、分らないか？ 分らないのも無理はない、三歳の時に別れたまゝだか

らね、お千代や。私はお前の母さんだよ、そしてお父さんも来ていらしやるのだよー お千代や……」しかし、お千代と呼ばれて、泣きながら話されるのを、却つて不思議さうに見返しながら、女は黙つて居る。

『お前はもう私等の言葉が分らないのか、忘れたのか？ 無理もない、三歳の時のまゝだからね』

母は流石に女心に果てしもなくわが子と思つて掻き口説くのであつた。その時通辯人が傍へ来て生蕃の言葉で話しかけた。

『お前の名はお千代といつて、言はずとも

知つて居やうがお前は日本人だ。それどころかこの村で生れて、この村で育つたのだが、三歳の時に生蕃に擄はれて行つた爲に、今の様な身になつたのだ。こゝに立つて居られるのはお前を生んで



下すつたお父さんとお母さんである。」通辯がかう言ふと女はぶつきらぼうに生蕃語で答へた。かういふのである――

『私は生蕃人だ、日本人ぢやない。私には父母などはない。私は日本人は嫌ひだ。私は生蕃人だ！』

これを聞いて母は聲を上げて泣いた。そして父は、矢張釘付けにされた様に、立つたまゝ一言も口を開かなかつた。

色々通辯の口を通じて、すかしたり、脅したりして見たけれども、女はたゞ『私は日本人は嫌ひだ、私は生蕃人だ！』と繰り返すだけであつた。

そこでふと思ひ付いて、この女をその生れた家の前に連れて行くことにした。そしたら、どうかして、幼な心にうつた事を思ひ出して、氣心も柔らかく

なるかも知れないと思つたからである。

先づ村長と村の總代たちが歩いた。その次にお千代の父と母とが行つた。それから巡查がその生蕃女を連れて従つた。數多の見物人が、海嘯の様にその後から押し寄せた。

漸く村はづれの古びた、小さな家の前に來た。家の前には三本の大きな櫟の木が並んで生えて居た。

『お千代や』と母はその木の根元に立つて、その梢を見上げては、又かの生蕃女を見ながら言つた。

『お前はこの木を覺えて居るかえ？ お前は毎日、

この木に止まつて喧ましく鳴き立てる雀をとつてくれと云つては、母さんを困らしたことを忘れた

かえ？』

それを通辯は傳へた。併し女は冷やかに答へた。

『そんな事は知らない。知つて居る筈がない。』

この頑固な言葉に人々は途方に暮れて了つた。見て居る數多の群集も追々と疲れて來て、欠伸をする者や、惡口を云ひかける者や、次第に四邊が喧まし

くなつて來た。

『矢張あれは日本人に似て居ても、實は生蕃の娘なのだらう。てなければ十八や十九の年頃であんな剛情な娘があるものか！』

と一人が言つた。

『さうだ、それにあれがお千代だなど、誰かいい加減な事をいつたのだらう。若し本當にお千代だつたら、あれ程母親が涙をこぼして話して居るのを、それに皆があゝして事をわけて云つて聞かすのを、少しは分りさうなものぢやないか！』

ともう一人が云つた。

『しかし現在の母親が人目も關はず掻き口説いて居る程だもの、まさか人違ひでもあるまい。それとも又「生みの親より育ての親」といふ諺もある位だから、それに此方では何も知らない時分に三年の間育てられたのを、彼方ではそれから十年も育てられたのだとすれば、よし氣が付いても早速名乗つて出られまいぢやないか。』

かう老年の男が言つた。

『成る程、さうかも知れないな。』

とそれを聞いて居た二三人の者が賛成した。

『全くそんなわけかも知れない。して見ればあんな生蕃の様な者に育てられた

のだから、自然氣も荒くなつて居るだらうし、そして十五年も前の事だし、その上此方に居た

間は何も知らない子供の時分

なのだもの、本當に生蕃の子だと思つて居るのかも知れないよ。』

『でも私には父母はないと云つたぜそれに如何にも憎らしさうに私は日本人

は嫌ひだといつた邊は、どうも意地からさう云つて居る様子だつた。ひよつとするとあれは生蕃の方

に義理立てをして、そのために此方について居る事はすつかり分りながら、あんな風をして居る

のかも知れないよ。』

こんな風に噂は口々にとりぐであつた。その中に、父は流石に男らしく何も彼もあきらめた様な顔

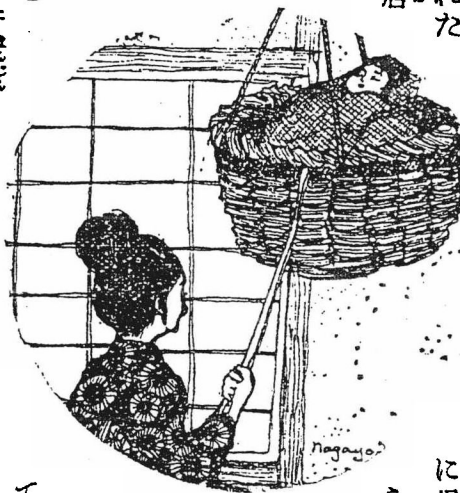
をして、しかし悄然と立つて居る。その傍に母は矢張あきらめ兼ねて、しかしもうその上いふ言葉もなく、泣きながら立つて居る。村長や村の總代たちは當惑した様に同じくその傍に立つて居た。

處が肝心の女は、一向皆には頓着なしに、きよろ／＼とその鷹の様な目で、隙があつたら逃げ

てやらうといつた風で、四邊を見廻したり、かと思ふと懷しさうにかの生蕃の方を眺めたりした。

『これ程までに云つても、お前は何も白狀しないのか?』

遂にかう通辯がいつた。



「殺すなら殺してくれ。」

と女は少し聲を荒々しく答へた。

『うるさい事はいはないで、早く片を附けてくれ！』

逃がすなら、早くあの私の山へ歸してくれ。そして
たら又今度はもつと多勢連れてくるから。それが
恐ろしければ殺してもいい。兎に角ぐづぐづいは
ないで早くどつちか片を附けてくれ！』

通辯はこの言葉を皆に通じた。皆の者は只茫然と
して了つて、返す言葉がなかつた。そこで暫らく四
邊が静まり返つた。

そのとき、家の中から静かな子守唄が聞えて來た。
家の中では、末の妹の五歳になるお露を、姉のお
小夜が寝かし付けて居たのであつた。小さいお露を
あの搖籃の中へ入れて、それを揺りながら、お小夜
は母さんに代つて、搖籃の唄をうたつて居たのであ
る。

その搖籃の中から、十五年前の昨夜、お千代は攫は
れて行つたのだ。その同じ搖籃の中で、今唄をうた

つて居るお小夜も育てられ、その弟も、今又一番
末のお露も育てられて居るのである。

坊やはよい兒だ

寝んねしな——

その懐しい搖籃の唄が、折りから静まつて居る人
々の耳に、皆をも眠らして了はうとするかの様に聞
えて來た。皆は又眠らされて了ひさうに咳一つせず
に静かに呼吸を凝らした。

と、その時、かの女はふるくと身震ひをした。
そしてその應の様な眼が今迄の凄い色を消して、子
供の様な無邪氣な色に光つた。

『お千代や！』

と、一分の間も眼を放さずに居た母は、かう聲を上
げて一二歩進み寄つた。

『お千代や、思ひ出したかえ？ 子供の時分の事を
思ひ出したかえ？』

その言葉を通辯がかの女に傳へた時には、女はす
てに元の通りの鋭い眼付さに返つて居た。そして頑

として答へた。

「私は早く山に歸りたい。私は生蕃人だ。さうでな

ければ早く殺してくれ！」

見て居る人々は再び口々に騒ぎ始めた。

「殺して丁へ！」

とその中からいふ者があつた。

「山へ逃がしてやれ！」

と外の者は叫んだ。

「殴り殺せ、いつまでも女一疋

に威張らしてあくな！」

と別の者が呶鳴つた。中には石

を一つ女の方に向つて投げた者

もあつた。

處が、餘りの騒々しさに、家

の中で切角眠りかけて居たお露が眼を覺ま

した。そして物に驚いた様に泣き出した。お小夜が

色々にすかして居る様であつたが、どうしても泣き

止まないで、却つて大聲に泣き立てるのであつた。



そこで仕方なく、母は家の内へ入つて行つた。も

う殆んど、あのお千代に違ひない女生蕃を我子に返

す事はあきらめて居たけれど、しかし涙は止まなかつた。そして泣きながら、むづかるお露をあやしつ

、靜かに搖籃を揺つた。そして母は泣き

ながら、知らず／＼搖籃の唄をうたつ

た。

ねんねをする兒はよい兒だよ――

戸外では、かの女を圍んで、折

りから見居る人々は三たび言

葉なく靜まり返つてゐた。その

中をかの母の憐れつばい搖籃の

唄が聞えて來た。

その靜かな、聞く人の腸に喰ひ込

む様な唄の聲に、人々は身震ひしつゝ耳を

傾けた。

同じ様に、かの生蕃の女はその唄を聞いた。ふたゝ

び、前よりは大きく身震ひした。ふたゝび前よりは